

対照的でありながら
絶妙のバランスで融合

「日光の社寺」



東照宮 陽明門
(日光フォトコンテスト入賞作品)



輪王寺 大猷院靈廟
(日光フォトコンテスト入賞作品)

ミシュランの観光地ガイドでも三ツ星の評価を得ている日光。都心から2時間程度で行けるとあって、東京観光とセットで訪れる人も多いのでしょうか。駅に降り立つと多くの外国人観光客を目にします。

明治時代に神仏分離令が出されるまでは、神仏を分け隔てなく崇めてきた日光山。奈良時代の末、勝道上人によって開かれました。関東の一大霊山として多くの信仰を集めてきた山々は、深い杉木立に覆われ、夏でも20度以下というひんやりした空気に包まれています。東照宮に代表される徳川の贅を尽くした豪華絢爛な建造物に圧倒される一方で、苔むした石灯籠や石畳を眺めてホッと一息…。緊張と緩和、人工と自然、喧騒と静寂。金色に輝く建造物と、それを取り囲む自然の色合いもまた、対照的でありながら見事に溶け合っています。

世界遺産に登録された「日光の社寺」には、日光山内にある東照宮と二荒山神社、それに輪王寺の103棟の建造物群に加え、これらの建造物を取り巻く「文化的景観」も含まれています。文化的景観とは、自然と人間の活動が互いに影響し合って作り出された景観のことです。例えば、二荒山神社の別宮滝尾神社本殿では、背面に扉が付けられ、そこから女峰山を拝めるようになっています。東照宮と大猷院靈廟では、山の地形を生かして境内を広くも狭くも見せ、空間の役割に合わせてゆとりと緊張が演出されています。

世界遺産の登録にあたっては、当時の日光市教育委員会に「世界遺産登録推進班」が設置されました。準備を進めるなかで特に大変だったのが、史跡等の広域にわたる「面的な保護」だったとか。建造物については国宝や重要文化

財として法的な保護がされていたものの、山林や境内などは保護されていなかったのです。保護地域に指定されるとさまざまな規制を受けます。地権者などの理解や協力を得るのも一筋縄ではなかったでしょう。

簡素な美しさにあらがうかのように、おびたしい装飾で彩られた東照宮。桂離宮を評価したドイツの建築家、ブルーノ・タウトにはどうも受けがよくなかったようですが、眠り猫や三猿に限らず、あらゆるところに張り巡らされた彫刻は、やはり見ごたえがあります。陽明門の逆柱をはじめとする魔よけの仕掛けを発見する楽しみもあります。広大な敷地内を散策すればメタボリック対策にもなりそうです。

技術の粋を集めた建造物+スピリチュアルな空間+四季折々の自然。日光には国籍を問わず多くの人を引きつける、不思議な魅力が詰まっています。



参考：「世界遺産 日光の社寺」日光市生涯学習課
<http://www.city.nikko.lg.jp/kankou/shaji/japanese/main.htm>